

作家

志茂田景樹さん

妻の手のひらの上で転がされてる
でも、上手に転がるのも難しい

もし、あのとき、別の選択をしていたなら……。ひよんなことから運命は回り出します。人生に「if」はありませんが、誰しも実はやりたかったこと、やり残したこと、できたはずのことがあるのではないのでしょうか。昭和から平成と激動の時代を切り開いてきた著名人に、人生の岐路に立ち返ってもらい、「もう一つの自分史」を語ってもらいます。

子どもに絵本の読み聞かせをする活動を始めてから、もう19年になります。ボランティアメンバーで「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国をまわっています。もうすぐ2千回を数えます。

きっかけは書店でのサイン会でした。「奇抜なファッションの志茂田景樹」を見たくて、それなりの人数が集まってくれた。ただ、僕のトークが終わるとスーツと帰っちゃって。博多のデパートの書店で行ったとき、隣がオモチャ売り場だったこともあって、親子連れが多かったんです。ふと思いついて、書店の方をお願いして、絵本を持ってきてもらい、「三匹のこぶた」と「赤いろうそく」を読んでみた。すると、小さな子どもたちが目を輝かせて、じっと聞いている。終わってから、子どもがわざわざ僕のところに来て、「面白かったよ」「また来てね」って言うて

くれたんです。お母さんたちからも感謝されました。そんなこと初めてで、ビックリするやら感激するやら、僕自身がハマっちゃったんですね。自分の子どもが小さかったころは、読み聞かせをしてあげたことはないんです。家にほとんどいませんでしたから。息子たちにちゃんと接してこなかったという、ある種の自責の念があるのかもしれない。

直木賞作品は
父親の写真から

僕がマイホームパパだったら……：悪くないなあと思うこともあるけど、志茂田景樹という作家としては、やっぱりこの人生しかなかったんだと思います。自分自身もどこか物足りなさを抱えることになるし、作品もつまらなくなっていたでしょう。

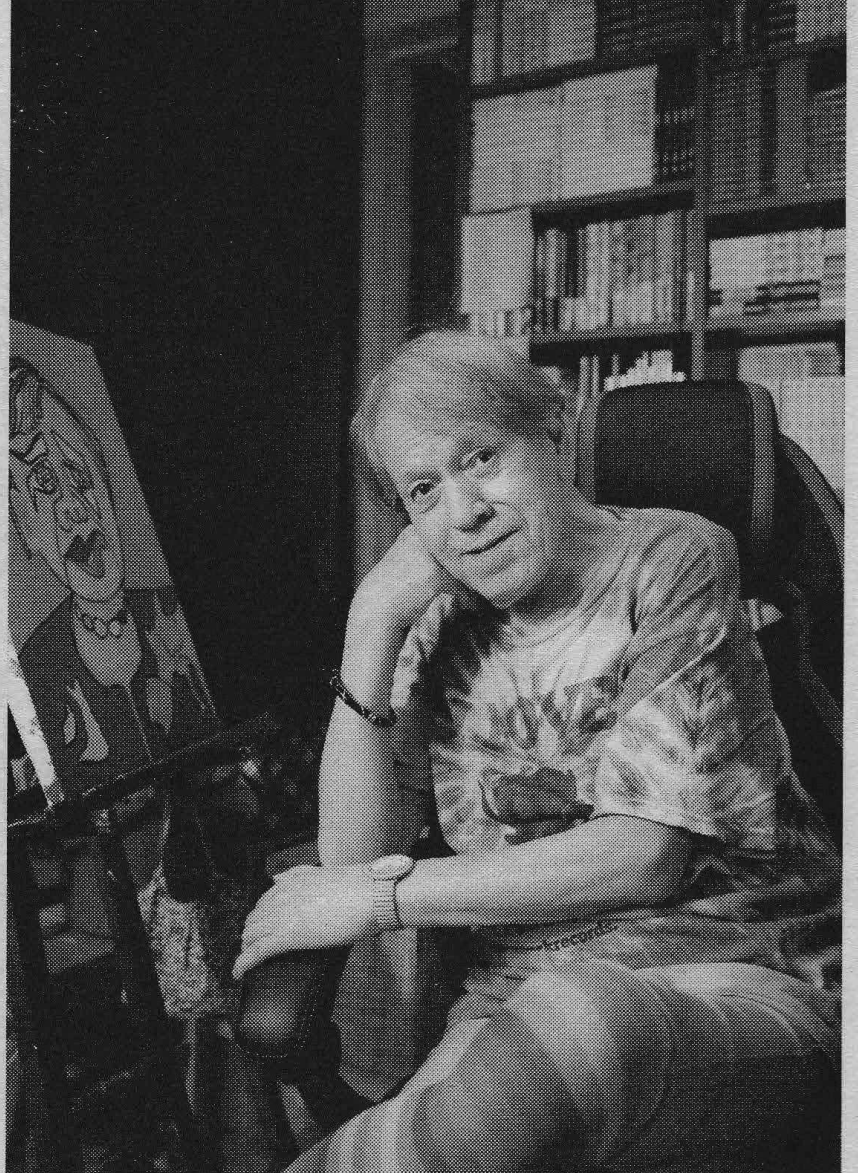
20代はセールスマンや探偵など職を転々とした。週刊誌の記者をしながら小説の応募を続け、36歳のときに作家としてデビュー。1980年にマタギを主人公にした大作『黄色い牙』で、直木賞を受賞した。

中学生のころ、国鉄の子会社にいたおやじが北海道の山奥で鉄道工事

をしていて、部下が仕留めたヒゲマの前で記念撮影した写真を送ってくれたことがあった。その写真を机の引き出しに入れて、何度も何度も見ていることを思い出して、マタギの話にしようと思ったんです。本が出来上がって、おやじに見本の束のいちばん上の一冊を渡したら、手で大事そうになで、「いい本ができたじゃないか」って満足そうに言うてましたね。

直木賞が決まったのはその数カ月後。編集者とお祝いで朝まで飲んで帰ってきた2階の仕事場でウトウトしてたら、配達されたばかりの新聞の朝刊で、おやじが僕の頭をつつくんです。「おい、載ってるぞ」って。そのころおやじは、重いがんで余命いくばくかという状態で、もう骨と皮みたいな体になっていました。玄関先に新聞を取りに行くのも、2階に上がってくるのも、もう無理な状態だったはずなのに。おやじならの祝福だったんでしょうね。そんなこともあって『黄色い牙』には思い入れがあるし、いちばん好きな作品です。

その後、年に何十冊も本を出す超売れっ子作家となる。1980年代後半は、数多くのバラエティ番組



しもだ・かげき 1940年、静岡県生まれ。76年に『やっそこ探偵』で小説現代新人賞を受賞。80年に『黄色い牙』で直木賞を受賞。80年代後半には、独特のファッションセンスが注目を集め、バラエティー番組に多数出演。99年に「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国をまわって子どもに本の魅力、大人に読み聞かせの大切さを伝え続けている。代表作に『天空の爪』『戦国の長嶋巨人軍』『キリンがくる日』など

にも出演。独自のファッションと忌憚のない発言で人気を集めた。

毎日、バラエティー番組に出ています。小説を書く時間は、ほとんどない。小説に専念しろとか、書けるのにもつたないとか言う人はいましたけどね。そんな修行僧みたいな生き方は、自分には向いてない。出版社は、売れてるからとにかくどんどん出しましょうと言ってくる。そこで考えついたのが、マイクロカ

セットテープに向かって語りながら「書く」方法です。

当時の東海道新幹線には個室があった。大阪に行くまでにその個室で片目を吹き込み、帰りに片目を吹き込んで、家に帰ってからちよつと整理すると、320〜330枚ぐらいの新書が1冊出来上がってしまう。水戸黄門と同じで、ステレオタイプ化してしまえば、話はどんどん作れるんですよ。

でも、だんだんむなしくなってきた

たんですよ。

そのときは分からなかったんです

けど、心の奥でその言葉がだんだん大きくなっていったんです。このままじゃいけないという気持ちがあった。心の中の空洞に逸見さんの言葉が響いたんじゃないかと思えます。

1996年に、自分が本当に出したい本を出版して、新しい才能を世に送り出すために、「KIBA BOOK」という出版社を立ち上げました。社名を「KIBA BOOK」

たんです。「平成教育委員会」のスペシャルの収録のときだったかな、病気で一時期お休みしていた逸見政孝さんが復活して、テレビ局のトイレで会ったんです。僕が「よかったですね」と声をかけたら、逸見さんが「志茂田さん、疲れませんか」って言った

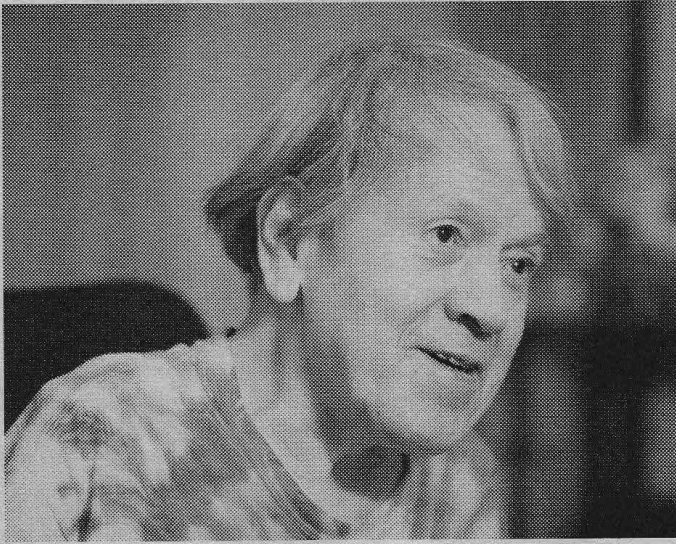
にしたのは、「黄色い牙」の原点に戻ろうという気持ちから。あれを書いたときには、たとえば主人公が冬山で遭難した仲間を助けに行く場面、たった数行の描写がなかなか書けなかった。苦しかったけど、それが楽しかったんですよ。そんな気持ちを取り戻したかったんです。

作家になる前から束縛が苦手で……

ただ、テレビに出まくったことや、口述筆記で作品を量産したことは、後悔していません。それはそれで楽しかったし、それが志茂田景樹の個性の一つだったわけですから。

私生活も、修行僧のような生き方とはかけはなれていた。夫婦生活は一時、破たん状態に。売れっ子作家になった志茂田が、ほかの女性と暮らし始めたことが原因だった。

作家になる前から、束縛というものが極めて苦手な、ひとつの場所に落ち着いてることができなかった。今でも、ひとりになりたいなと思うこともあるんですよ。もう家を飛び出したり、女性とどうこうしたりする気もありませんけど、この性分



は、どうしようもありません。

怒られそうですが、あのときはそうするしかなかったんですね。あの種の開き直りですが、別の家だけど、同じ地球上にいるからいいんじゃないかと思っているとこちらもありませんでした。妻も相手の女性も深く傷つけておいて、そんな言い草はないだろうとわれながら思いますけど。

独りよがりかもしれませんけど、紆余曲折を経て、おさまるところにおさまったんじゃないかと思っます。いったんバラバラになって、元に戻る。人間にはそういうところ

がある気がします。

今、絵本の読み聞かせの活動で、全体を取り仕切ってくれているのはカミさんです。考えてみたら、その活動を一緒にやっている期間のほうが、僕が好き勝手やっていた期間よりもずいぶん長くなった。

僕が作家になる前は、カミさんは、何をやっても長続きしない旦那のことが、さぞ心配だったと思います。

狭いアパートでカミさんが、僕の目につくところに小説の雑誌や本を置いていたのは、「こういう道はどう？」と勧めていたのかもしれない。口では何も言いませんでしたが、

来年で結婚50年になります。振り返ると、結局は妻の手のひらの上で転がされているんですね。でも、落っこちないように上手に転がるのも、それはそれで難しいんですよ。

最近では、創作活動や絵本の読み聞かせ以外に、ネットを介しての人生相談も評判になっている。なぜ、若者に支持されるのだろうか。

東日本大震災以降、ツイッターで悩みが寄せられるようになったんです。すべてに返事をすることはできないけど、ああ、この人は答えを欲しがっていると思うものには、答

えるようにしています。

長方形の窓の向こうに海が広がっていて、何も見えないけど、海の中にいろんな魚がいるように、いろんな人間がいるんじゃないか。茫洋と広がっているネットという海に向かって、何が返ってくるんだろうと思いつつ、何が発信したら、思った以上に反応が多かった。

戦地の兄へ手紙 返事は宝物です

昔は世代が違って、お互いの土俵は何分の1かは重なっていたけど、今はまったく別になってしまった。

価値観や常識が大きく違う。それでも、70代後半の僕の言うことを若者が聞いてくれて、時には救われたと言ってくれる。悩みというのは、本質的には変わらないんですよ。

最後に、作家として死ぬまでに書きたいテーマを聞いた。

私たちの世代にとって、戦争の記憶はとて大きいですね。僕には15歳の兄がいました。昭和20年の3月に出征し、当時の満州に送られて8月15日の終戦後に戦死しました。兄は4歳だった僕に字を教えてく

れました。当時住んでいた国鉄の官舎の廊下の結露したガラス窓に、「これがア、これがイ」って書いてね。戦地の兄にたどたどしい字ではがきを送ったら、返事が来ました。検閲があるから「早く兵隊さんになって敵の飛行機を落としてください」なんて勇ましいことが書いてあった。今でも僕の宝物です。

東京大空襲で、東の空が赤く染まっている光景は、今でも忘れられません。隣組で大人たちが、竹槍でわら人形を突きさす訓練をやっていたのも、よく覚えてます。子ども心に「くだらないことやってるな」と感じていました。

当時、満蒙開拓青少年義勇軍という10代の青少年を満州の開拓民として送り出す制度があつて、20年ほど前、生き残った人たちの集まりに呼ばれたんです。そのときに資料をたくさんお預かりして、いつか本にしてほしいと頼まれている。少しずつ読み込んでいますが、まずはそれをテーマにした小説を書きたい。

『黄色い牙』のときのように、じっくり取り組んで、一行一行に気持ちをしつかり込めた骨太の作品にするつもりです。そういう作品を書きあげるまでは、死んでも死に切れません。

聞き手 石原壮一郎